

# 民国初年における『戯考』の文化的位置

松浦 恆雄

## 1 はじめに

### 1-1 『戯考』とは

京劇史上、欠かすことのできない台本集に、清末の『梨園集成』、民国初年の『戯考』、そして建国後の『京劇叢刊』と『京劇彙編』の四種がある。京劇史上最初の大掛かりな台本集である『梨園集成』（光緒6年1880年）が京劇の成熟段階を示すとすれば、民国初年に刊行され全40冊からなる『戯考』は、その後の京劇の多様な展開を反映していると言って良いだろう。伝統演目と新作物を併せて収録した『戯考』の出版は、様々な角度から京劇の現代化を推進する役割を果たした。しかも『戯考』は、民国初年から建国に至るまで、顧曲家に最も愛された京劇台本集であり、以下に考証するように、『戯考』は幾度も出版社を変えながら、三十余年に渡って影響力を持ち続けた。

しかし、建国後は、京劇台本の定本を確立した『京劇叢刊』や京劇の膨大な遺産を継承すべく編集、出版され、『戯考』を凌ぐ大部な台本集となった『京劇彙編』などの存在により、すっかりその影響力は失われた。もちろん、『戯考』が研究対象として取り挙げられることもほとんどなかった。

### 1-2 先行研究

『戯考』刊行後、最も早く史的考察を加えたのは、鄭振鐸「中国戯曲的選本」（『小説月報』第17巻号外「中国文学研究」（下）1927年6月所収）である。鄭振鐸は、『戯考』が収録する京劇台本の文学的価値は認めなかったが、『戯考』が類書の中で最も多くの台本を収録していることを高く評価した。それは、「もしこうした選本がそれらの台本を保存しなかったら、それらの大半はとっくに散逸してしまっていただろう」からである。つまり、鄭振鐸は、古い京劇台本を保存した点にしか『戯考』の価値を認めなかった。ただし、鄭振鐸がこの文章を執筆した時、中華図書館版の『戯考』は、まだ本屋の店頭に並んでいたはずだ。『戯考』の演劇史に果たす役割の分析まで、彼に求めるのは少し酷かも知れない。

鄭振鐸を殆ど唯一の例外として、民国時期のほぼ40年間、『戯考』は愛読されながら、研究の対象となることはなかった。それに続く建国後の四半世紀も、京劇の台本と言えば、前述した新しい選本が主流を占め、『戯考』は顧みられることがなかった。

ところが、突如、『戯考』が復活する。1980年に台湾・里仁書局から、また1990年に上海書店から、それぞれ影印本が刊行され、『戯考』は、ようやくその資料的価値が見直され市民権を取り戻したのである。『中国京劇史』上巻（中国戯劇出版社、1990年11月、1999年9月の改訂版も同じ）や『中国戯曲志・上海巻』（中国ISBN中心、1996年12月）といった権威ある著作にも、『戯考』が項目として立てられ、京劇史の中に位置づけられるようになった。しかし、それらの記述を検分して見ると、紙幅の都合もあったであろうが、簡略でしかも誤りが多く、とても『戯考』の重要性に見合った記述

とは言いがたい。例えば、『戯考』の著者や出版年がすでに誤っているのである。

『戯考』の研究らしい研究が現れたのは、陸大偉 (David Rolston) 「《戯考》的現代意識」(『戯曲研究』第74輯、2007年8月、のち『京劇与中国文化伝統』文化芸術出版社、2008年9月所収)が最初である。本論文は、民国年間に出版された『戯考』というテキストに、どのような現代意識が盛り込まれているのかを、様々な角度から明らかにした労作である。「戯考」の主な執筆者であった王大錯の文化思想の反映としての現代意識(反迷信など)などを丁寧にその記述から掘り起こして整理し明らかにしている。

もちろん、この論文にも、先行する記述の誤りを踏襲しているところがある。しかし、陸大偉氏の論文が『戯考』に対する認識を大幅に向上させ、高い史的意義を付与したことは疑いがない。

本稿の第一の目的は、陸氏を含むこれまでの『戯考』に対する記述・研究を踏まえた上で、まだ十分に明らかになっていない『戯考』に関する様々な事実関係を明らかにすることにある。第二に、そうした作業を通じて、『戯考』の民国初年における文化史的な位置づけを具体的に提示し、先行する記述や陸氏の議論を補完したいということである。

## 2 『戯考』の出版元・中華図書館

### 2-1 葉九如と中華図書館の設立

『戯考』についての考察を始める前に、その最も中心的な出版元となった中華図書館がどのような出版社であったのかを明らかにしておきたい。

中華図書館は、朱聯保によれば、「河南中路と交通路(今の昭通路)の交差点に設けられ、民国初年に葉九如が創設した」<sup>1)</sup>という。葉九如と言えば、清末から民国年間にかけての出版業界においては、比較的名前の知られた人物であった<sup>2)</sup>。1905年10月、出版業の盛んになった上海に、出版社のギルド組織である上海書業公所が再度結成されるが、彼は当時所属していた点石齋書局を代表してその成立に尽力し、選挙によって調査員に選出されている。1930年、複数あった出版社のギルド組織が再編され、上海書業同業公会が結成された際、彼はその副董事に選出されている。

また、彼は書業正心団を組織して風紀を乱す書籍を取り締まったり、同業者が日貨ボイコットに従わなかったことに腹を立てて副董事の職を辞したり、上海書業私立崇徳小学校の理事を務めたりもしている。こうしたことから、彼が同業者の間に人望のある、気骨ある出版人として知られていたことがわかる。もちろん、彼は「資金力がありやり手の、比較的教養のある出版人」<sup>3)</sup>と言われるように、出版戦略にも長けた出版人として一目置かれる存在であった。

次に、葉九如が、民国初年に中華図書館を立ち上げるまでの足取りを追ってみよう。彼が所属していた申報館付設の点石齋書局が、1907年、申昌書局、開明書店と合併して集成図書公司となることは、すでに指摘されている<sup>4)</sup>。

では、この集成図書公司は、その後どうなったのであろうか。朱聯保「集成図書公司」はこう記す。「1912年、黎元洪、張伯烈、劉成禺たちは集成公司を買収して、民国第一書局に改組し、また教科書の編集に従事したが、組織が不十分だったため不首尾に終わった。1914年、武漢に移って廃業した」<sup>5)</sup>。この記述に、上海市書行同業公会の檔案資料である「民元以後新增加的書局」<sup>6)</sup>に見える「中華図書館印局(北泥城橋)」の一条、同じく「民元改換牌号的書局」<sup>7)</sup>に見える「集成図書公司、

中華図書館と改める」、「集成公司印刷所、第一図書館と改める」の二条を加えて推測すれば、集成図書公司（と付設の印刷所）は、民国元年に、付設の印刷所が買収されて民国第一書局となり、その編集部（棋盤街）は葉九如が引き継ぎ中華図書館（棋盤街）を立ち上げたのではなかろうか。そのため、中華図書館は、別途、中華図書館印局を開設する必要があったわけである。民国初年の中華図書館の出版物には、印刷者の住所が「北泥城橋西首」と記されており、上記の「中華図書館印局」の住所に合致する。以上のような推測が正しいとすれば、葉九如は、点石齋書局から、集成図書公司を経て、民国元年に独立して中華図書館を創設したことになる。

では、中華図書館は、どのような図書、雑誌を出版していたのであろうか。当時の出版社にとって、売れ行きの最も確実な出版物は、教科書と実用書であった。しかし、彼が以前所属していた集成図書公司が初級小学校用の教科書を編集して失敗した苦い経験を身近に見ていたためか<sup>8)</sup>、中華図書館は、教科書は扱わず、実用書の出版に力を入れたようである。『戯考』や『礼拝六』に掲載された中華図書館の出版広告に拠ると、『注釈共和進行尺牘完璧』、『中華詳注女界尺牘』、『民国商業経済尺牘』といった「共和体の新尺牘」の範例集や『中華新字典』、『中華歴史地理大辞典』、『文科大詞典』などの工具書を多く出版していたことが分かる。ただ、それだけでは普通の中小出版社と変わらなかっただろう。

## 2-2 鴛鴦蝴蝶派系の文芸雑誌の刊行

中華図書館が次に目をつけたのが、清末から民初にかけて続いていた小説、文芸雑誌のブームであった。中華図書館は、鴛鴦蝴蝶派系の文芸雑誌を多く手がけることにより、その出版社としての基盤を確立していったものと思われる。もちろん、当時は、鴛鴦蝴蝶派という言い方はなく、それらはいずれも市民に健全な娯楽を提供することを目的としたものであり、当時の文壇の主流を形成してゆく。以下に、その雑誌名、号数、主編者名などを列挙してみよう<sup>9)</sup>。

遊戯雑誌：1913年—15年、全19期。王鈍根・天虚我生主編。

礼拝六：1914年—16年、21年—23年、全200期。王鈍根・孫劍秋・周瘦鵬主編。

香艷雑誌：1914年—15年、全12期。新旧廢物（王均卿）主編。

女子世界：1914年—15年、全6期。天虚我生主編。

当時刊行されていた鴛鴦蝴蝶派系の文芸雑誌の過半は、10期に満たずして廃刊になっていることを考えると<sup>10)</sup>、上記の一覧に見る限り、中華図書館の文芸雑誌は、よく売れていたと言えるであろう。同じ中華図書館の出版物である『新劇考』に掲載された広告に拠れば、『遊戯雑誌』は「每期必ず数万冊売れ」、『礼拝六』の「毎期の売れ行きは一万六、七千冊にのぼった」という<sup>11)</sup>。また、『礼拝六』第一期に掲載された『香艷雑誌』第二期の広告に拠れば、「本雑誌第一期が出版後各省に広まり売れ行きは八千部以上に達した」という。これらの数字に誇張が含まれているであろうことは疑いないが、全くの作り話とも思えない。周瘦鵬は、『礼拝六』が創刊されたばかりの頃のことを回想して次のように述べている。「毎週土曜の朝になると、『礼拝六』を発行する中華図書館の門前には、黒山の人だかりができて開門を待っていた。門が開くや、我先になだれ込み購入した。その様は、早朝に大餅や油条を争って買い求める様に似ていた」<sup>12)</sup>。ここに再現された読者の『礼拝六』購読に対する異様なほどの熱気は、毎週末、仕女の絵が表紙を飾る洋装本の雑誌という媒体で小説を消費す

ることが、当時の読者にとっていかに魅力的であったかを伝えてくれる。それは恐らく、文明的な媒体によって健全な娯楽を享受する、新しい大衆（国民）文化形成の幕開けを意味していた。

さて、上記の一覧からは、葉九如は、民国初年のほぼ同時期に、読書傾向の異なる複数の読者層を想定し、そこに狙いを絞った雑誌を立て続けに刊行し、その相乗効果による部数の伸びを図ったように思われる。例えば、『遊戯雑誌』は「滑稽文」「詩詞」「説部」などのほかに芝居にも重点を置いた編集方針を採り、いわば健全な文章遊戯の総合誌という体裁である。『礼拝六』は、長短様々な小説のみを掲載し、小説好きのための小説誌に特化した。また、『香艶雑誌』は、女性の伝記、女伶の月旦、女界の新聞など、女性を批評（品評）の対象とする文章が多く集められており、男性読者だけでなく「女性の定期購読者もとても多い」（『礼拝六』第一期広告）と言う。一方、『女子世界』の一番の売りは、恐らく女性読者からの詩詞の投稿を掲載する「名媛集」欄が設けられたことであろう。本誌は明らかに女性の視線を意識した編集方針を採っており、新作の弾詞を連載し、「工芸」欄に裁縫、割烹、化粧の記事が載り、「家庭」欄、「衛生」欄なども設けられている。葉九如が仕掛けたこの出版戦略は、少なくとも最初の数年間は、見事に的中した。

中華図書館は、雑誌以外にも、民国初年に流行した掌故野聞、歴史演義、宮闈秘史といったジャンル<sup>13)</sup>に属する読み物も多く手がけている。こうした状況から総合的に判断すれば、民国初年の文壇の趨勢は、中華図書館の出版事業によって創り出されていたといっても過言ではない。

### 2-3 演劇書の刊行

こうした多様な娯楽を提供する文芸雑誌や文学書とほぼ同時期に、中華図書館は、さらに演劇書へと手を伸ばした。旧劇では『戲考』、新劇では、馮叔鸞の『嘯虹軒劇話』（1914年4月）と『新劇考』（1914年6月）である。『嘯虹軒劇話』は、題名通り、当時盛行していた文明戯（新劇）と京劇の「劇話」、つまり評論集、『新劇考』は「ほぼ戲考の例に倣い、新劇の著名な大人物を招き新戯考を編纂、世の新劇の研究を好む読者にお贈りする」<sup>14)</sup>という『戲考』の新劇版であった。『新劇考』は、本来、『戲考』のようにシリーズ化する予定であったようだが（『新劇考』の奥付には「新劇考第一冊」と記してある）、肝腎の文明戯自身が、その後急速に凋落するため、シリーズ化は実現しなかった。

以上のように、中華図書館は、多様な娯楽を提供する文芸雑誌や小説と『戲考』のような演劇書を同時に編集、刊行していた。1902年の梁啓超「小説界革命」に演劇が含まれていたように、民国初年の人々にとっても、小説と演劇はほぼ同種のものに見なされていたであろう。芝居の台本と言っても、のちの話劇のように登場人物ごとにセリフが改行されることもなく、小説のように読んで楽しむことのできるものであった。また、当時の一般の人には、新旧の演劇の差もそれほど明確に認識されていたわけではなかった。

中華図書館を設立した葉九如には、その出版社名からも伺えるように、中華民国の新しい文化形成を出版事業によって担ってゆこうとする意欲が感じられる。もちろん、葉九如が出版人である以上、そこに商機を見出したからこそ、出版事業を起こしたわけであるが、この両者は対立するものではなく、一体化したものと考えるべきであろう。ただ、葉九如が意識していた中華民国の新しい文化というのは、五四新文化のようなエリート文化ではなく、普通の市民（何とか文字が読める程度のリテラシーを持った階層）が日頃接触しているような文化の再構築（例えば、芝居を見る前後にその台本や評論を読む）、或いはそれに匹敵するモダンな文化を新たに構築する（例えば、毎週土曜日に娯楽小説を読む）ことであったであろう。この点については、のちほど触れることにする。

### 3 『戯考』の出版

『戯考』の出版については、すでに定説がある。『中国京劇史』上巻、『中国戏曲志・上海巻』のいずれもが、民国四年（1915）に出版が始まり、民国十四年（1925）に出揃ったという記述で一致している。これらに先立つ『京劇知識詞典』（天津人民出版社、1990年10月）も同様である。

これらはいずれも中華図書館版の『戯考』について述べたものであるが、実際に調査を進めるうち、中華図書館版に先立つ版があることに気がついた。それが、申報館版である。

#### 3-1 申報館版『戯考』

中華図書館の文芸雑誌の主編として活躍する王鈍根は、1911年8月24日から1915年3月17日まで『申報』「自由談」の主編も務めていた。その「自由談」が最も重視したのが「遊戯文章」であり、彼の手になる文章や小説にも、様々な「遊戯」が凝らされている。

さて、その「自由談」に、1911年9月8日から、呉下健児による「戯考」の連載が始まる。休載の日もあるが、ほぼ毎日、1911年12月26日まで108回、計107齣の演目を紹介し、その粗筋、聞き所、役者の演技などを簡潔に記している。この連載は、好評だったようで、翌1912年3月5日から再開され、今度は6月15日まで88回、88齣の演目が紹介される。その後も間隔は空くが、間歇的に連載が続けられてゆく（8月26日まで）。

1912年7月1日、『申報』「自由談」下欄に「你愛看戲麼」という広告が掲載される。これは、呉下健児の「戯考」が好評をもって迎えられているため、それを編集して出版するという広告であった。その本は「内容豊富、どの演目にも極めて詳細な説明、最も流行している唱本、その演目を得意とする名伶の写真がつく」と説明された。その後の広告では「名伶の写真」が「男女名伶の写真」となり、さらにその後に「色芸双絶の歌姫の雪のような肌、花の顔が映える」（7月20日）という語が付け加わる。恐らく、必要な名優の写真の入手が困難であったための代替措置であろう。

翌8月11日、『申報』に「戯考出版了」という広告が出て、『戯考』第一冊が正式に出版されたことがわかる。その広告には、名伶の写真と収録台本についての詳細も記されている。上海図書館蔵本は、呉下健児撰述・鈍根編輯・頌斌校勘『戯考』第一冊、申報館、民国元年8月初版、である。

『戯考』の内容は、一名伶の写真、二戯考、三曲本に分かれるが、このスタイルは中華図書館版でも変わらない。名伶の写真は、口絵にまとめられ5枚10頁（第一冊のみ6枚12頁）という相当な分量がある。次に、演目ごとに、「戯考」（説明）と「曲本」（台本）が載る。「戯考」部分の記述は、『申報』「自由談」に連載された「戯考」の文章に潤色を加えたものが概ねそのまま用いられている。第一冊には、20齣の台本が収録された。

では、『戯考』は申報館から第何冊まで刊行されたのであろうか。今、確認できるのは、第二冊までである。『申報』民国2年4月29日に「戯考第二冊」の広告が掲載され、その広告は、同年5月23日まで続くが、その後『申報』に『戯考』の広告は掲載されなくなる。

以上の結果から、申報館による『戯考』の出版は、第一冊民国元年8月初版、第二冊民国2年4月初版（未見）、とまとめることができよう。

しかしながら、『戯考』第一冊刊行後に、「徵求名伶小影」（『申報』民国元年8月20日）という広告が繰り返し掲載されていることにも注意したい。この広告が「戯考を出版するため、広く古今の名

俗の写真を収集して巻首を飾る」と述べていることから考えると、申報館は、今後長期にわたって『戯考』を出版するための準備作業として写真の収集に力を入れ始めたのだと理解することができよう。とすれば、申報館は、なぜ急に第二冊で『戯考』の出版を打ち切ってしまったのであろうか。

実は、『戯考』第二冊が刊行された約一カ月後（『申報』民国2年6月4日）、「每冊一百齣之戯考新編」という広告が載る。その広告文には、次のような内容が記されていた。

顧曲家健児は申報館のため戯考二冊を編集したが、一ヶ月のうちに一万二千部を売り上げた。これは社会の顧曲水準が進歩した証であるが、実際、戯考が観客に便利であったからでもある。ただ、毎冊二十演目しか載らず、一冊ずつ出版していたのでは、読者を待ちくたびれさせることになる。そこで、別に体裁を定め、戯考新編を編んで読者に供したい。毎冊百演目の詳細なる解説を載せ、何とか文字が読める程度の者も、この戯考を携帯して観劇すれば、分からない劇はないのである。

呉下健児は、『戯考』が予想を遥かに上回る売れ行きであったことに気を良くして、申報館から独立して、新たに『戯考新編』なる書物を時中書局から出版したのである。この書物も幸い上海図書館に所蔵されている。健児編輯『戯考新編』時中書局、民国2年5月、である（但し、広告は「六月五日出生（陰曆五月初一日）」）。確かに100齣の「戯考」だけが掲載され、「曲本」はない。広告文は、さらに、残り二冊との三冊セット（上・中・下）で一冊二角計六角（『戯考』の二角五分よりも安い値段設定）、安くてお買い得だと宣伝している。しかし、どうやら二匹目のどじょうはいなかったようだ。この本は売れ行きが悪く、上冊だけで終わったようである（中冊、下冊は出版を確認できない）。

申報館は、『戯考』の広告の末尾に「他家不得抄襲翻印」という一文も書き込んでいたのだが、これは、正に呉下健児が行ったような行為を防ぐためであったと思われる。恐らく、申報館は、『戯考新編』の刊行を見て、『戯考』の打ち切りを決めたのであろう。

呉下健児は、『申報』「自由談」の「戯考」連載終了後も、玄郎という新しいペンネームで『申報』に劇評を書き始めていた<sup>15)</sup>。しかし、この一件があって以降は（1913年8月）、ふつりと『申報』紙面から名前が消えた。

### 3-2 中華図書館版『戯考』

『戯考』の頓挫を誰より残念に思ったのは、王鈍根であろう。彼は『申報』「自由談」の主編兼『戯考』の編輯者であり、自らも劇評を書くほどの芝居通であった。「戯考」の連載を本にまとめるというのも、彼の発案かも知れない。

ただ、『戯考』の継続出版には一つの問題があった。それは、さすがに呉下健児を再起用することはできないということである。そこで急遽、王鈍根は、旧知の王鼎に頼んで「大錯」というペンネームをでっち上げ、呉下健児に代わって「戯考」の続編を書き下ろしてもらうことにしたのだと思われる。王鼎は、王鈍根と同じく南社の一員であり、『南社叢刻』第17集に詩を寄せている。のちに王鈍根が『礼拝六』の編集に当たると、その編集同人にも加わっている<sup>16)</sup>。王鼎は、これ以降、大錯というペンネームを用いて小説の創作などにも手を染めてゆく。

中華図書館が申報社から『戯考』を引き継いだのは、葉九如が申報館付設の点石齋書局の出身であったことも関係しているかもしれない。例えば、1913年に申報館から発行された『自由雑誌』の

販売を中華図書館が請け負っている（『申報』同年10月6日、10月31日広告）<sup>17)</sup>。このような業務提携は、葉九如と申報館との密接な関係を想像させる。もちろん、中華図書館が、申報館の版型を買い取ったとも考えられ、これ以上のことは分からない。

大よそ以上のような経緯ののち、『戯考』は中華図書館から引き続き出版されることになった。その出版期日については、すでに記した定説以外に、近年新たな説も現れている（例えば、顔全毅『清代京劇文学史』（北京出版社、2005年5月）は「1915-1929年」とする）。

そこで、筆者は中華図書館版の『戯考』の出版状況を確認するため、名古屋大学青木文庫所蔵『戯考』第一冊～三十冊（青と略）、京都大学文学部所蔵『戯考』第一冊～十七冊（京と略）、上海図書館所蔵『戯考』20冊（上と略）を調査した。（なお、東京大学双紅堂文庫に中華図書館版『戯考』30冊、倉石文庫と同じく29冊が所蔵されているが、今回は時間の都合で調査が間に合わなかった。）

まず、調査の結果明らかになった各冊初版の出版年を以下に記す。

第三冊	民2年10月初版（京）
第五冊	民3年1月初版（京）
第十冊	民3年12月初版（京）
第十一冊	民4年5月初版（京）
第十二冊	民4年12月初版（京）
第十三冊	民5年10月初版（京）
第十四冊	民5年11月初版（京）
第十五冊	民5年12月初版（京）
第十六冊	民6年3月初版（京）
第十七冊	民6年4月初版（京）
第二十五冊	民7年10月初版（青）
第二十八冊	民8年6月初版（青）
第三十冊	民8年10月初版（青）
第三十五冊	民12年7月初版（上）
第三十六冊	民13年2月初版（上）
第三十七冊	民13年3月初版（上）
第三十八冊	民13年4月初版（上）

『戯考』第四十冊初版本の情報を入手することはできなかったが、上記の結果から暫定的に言えるのは、中華図書館による出版は、1913年10月に始まり、1924年4月以降に完結した、ということである。第三十六冊から第三十八冊までの刊行情況からすれば、1924年内に完結したことも考えられるが、全体を通した出版期日が不定期であるため、確定はできない。

中国で1915年から1925年の十一年間に刊行されたと記される根拠はよく分からないが、上海図書館所蔵本の最も早い出版年が第六冊民国4年10月6版であり、最も遅い出版年が第二十六冊民国14年6月2版であるからではないかと思われる。

中華図書館版の『戯考』も、申報館版に勝るとも劣らない売れ行きであった。『戯考』第六冊（民9年10月再版、但しこの再版の記載は明らかに誤記である）に掲載された広告（「推广营业不可不登广告!!!」）

の記述に拠れば「毎年、毎冊、平均三万冊あまりの売れ行きである。現在三十冊まで刊行され、三十一冊、三十二冊も印刷に入り出版を急いでいる。毎年三十冊の売れ行きを合計すれば、百余万冊は下らない。しかも一冊売れば友人同士で回し読みをするので、実際に読むのは一人に止まらない。ゆえに百余万冊は、実際には数百万人、いや一千余万人が読んだことになる」。この数字にも誇張は含まれていようが、申報館版の売れ行きから判断すれば、決してあり得ない数字ではない。『戯考』は民国時期最大のベストセラーだと言っても良いだろう。

では、中華図書館版の『戯考』が全四十冊揃った後、いつまで再版され続けたのであろうか。今わかっているのは、1925年には、上記の第二十六冊以外にも、第十七冊（民国14年5月16版、上）、第三十冊（民国14年5月16版、上）、第三十一冊（民国14年5月16版、上）、第三十四冊（民国14年5月16版、上）など多くが再版されていることである。このことからすると、1925年5月段階では、全四十冊が揃っていた可能性が高い。ただ、1926年以降も『戯考』が再版され続けたことを確認する材料は、目下の所見つけ得ていない。

なお、『戯考』が第二十冊まで刊行された時点で、四冊を一冊にまとめたハードカバーの合訂本五冊が刊行されている。また、前述陸大偉論文に拠ると、四十冊が揃ったあとに「『戯考』予約目録」が出され、その後ろに付けられた広告は、合訂本十冊の予約購読者を募るものであるという。これらの事実は、『戯考』の新しい読まれ方、収蔵のされ方を示唆する興味深い事実である。

### 3-3 大東書局版『戯考』

1930年代に入ると、『戯考』は、中華図書館からさらに大東書局へと版元を移して出版されることになる。大東版の『戯考』の後刷りには、口絵の写真も奥付もないものがあり、出版年の特定が難しい。今回、出版年を確認できた大東版は、上海図書館所蔵本のみであった。調査結果を出版年によって整理すると以下のようなになる。

民20年9月初版	第四、五、九冊。
民20年10月初版	第十一、十二、十四、十五、十七、十八、十九冊。
民22年10月2版	第一、二、三、六、七、八、十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十六、三十七、三十八、三十九、四十冊。

以上の結果から推測されるのは、大東書局は、1931年9月以降、毎月十冊ずつ新たな表紙をつけて『戯考』を刊行してゆき、1933年10月、40冊まとめて再版本を出したということである。前述した台湾・里仁書局や上海書店の影印本は、これによっているものと思われる<sup>18)</sup>。

大東書局が再版本を出していることから分かるように、『戯考』に対する需要は、1930年代に入ってから依然衰えていなかった。にもかかわらず、中華図書館が大東書局に版權を譲り渡したのは何故であろうか。この間の事情を理解するには、「上海市書業同業公会会員録」（民国19年6月）<sup>19)</sup>を参照する必要がある。この会員録は、『出版史料』に掲載されるに当たり、編者によって、民国22年、23年、25年の会員録によるその後の情報が「備注」欄に書き加えられている。

民国19年版の会員録の中華図書館の項を見てみると、「資本金額」も「去年営業総金額」も記されておらず、「職工人数」は会員中最も少ない二名である。これでは、殆ど開店休業状態ではないだろ



うか。また、「備注」欄には「二十年停業出會」（二十年廢業退會）と記されている。理由は不明であるが、葉九如は、1920年代末くらいから出版事業に対する意欲を失い、ついに20年守ってきた中華図書館の看板を1931年に降ろし、退会してしまったのである。そのため、売れ筋の『戯考』を大東書局に譲ったのであろう。

では、なぜ大東書局でなければならなかったのか。例えば、葉九如と大東書局を結びつける人物に王均卿がいる。彼は、大東書局創設時の四人の出資者の一人であると同時に<sup>20)</sup>、中華図書館の雑誌『香艷雜誌』の主編も務めていた。彼以外にも人脈の繋がりがあったことは確認できるが、今の所、それ以上のことは分からない。

## 4 『戯考』の作者

さて、ここからは申報館版及び中華図書館版の『戯考』（1912年8月～1924年或いは25年）について考える。『戯考』の作者は、第四冊以降、「述考」・「編次」・「正曲」・「校訂」の四者によって構成される。

### 4-1 「述考」

「述考」（或いは「撰述」）は、申報館版が呉下健児、中華図書館版が王大錯である（但し、第三十二冊のみ「呉下健児撰述」）。呉下健児は、本名顧乾元、筆名に玄郎<sup>21)</sup>。申報館版が呉下健児の執筆であるのは、『戯考』の「例言」に「本書は健児の知るところを筆により記録して成った」と述べる通りである。彼の経歴は、殆ど分かっていない。『申報』「自由談」に「戯考」の連載を始めるに当たって「小生、申江に身を潜めて今日で三十年になる」（1911年9月8日）と記すところから、1880年頃から上海で暮らしてきた人物であることが分かるぐらいである。

王大錯は、すでに記した通り、王鼎の筆名。王鈍根の勧めで、雑誌の編集、創作などの文筆業に進んでいったものと思われる。彼は、急に呉下健児のピンチヒッターを任され「戯考」を書き下ろさねばならなかったためであろうか、例えば「斷太后」（第三冊）のように、呉下健児の『申報』「戯考」の記述を殆どそのまま写したものもある。

なお、上海図書館で王大錯の名前を検索すると、専著として『考証古本三国志演義』（大衆書局、1933年3月）、『篆法入門 篆法指南』（天津古籍出版社、1991年）、共著として『劍俠呂四娘演義：清朝第一女侠』（益新書社、1936年6月、8版）、『満清十三朝宮闈秘史』（緑天書屋、1919年）などの著作を確認することができる。また、『禮拜六』（第199期、1923年2月）の広告には、前述した『考証古本三国志演義』の元本と思しき『考証三国演義』の宣伝が見える（出版の有無は未確認）。

### 4-2 「編次」

「編次」は、王鈍根である。王鈍根は、言うまでもなく、1910年代の上海文壇において最も影響力のあった文人である。彼については後ほど詳しく触れることにする。

### 4-3 「正曲」

「正曲」は、徳福（第四～十二冊）、志強（第十六～三十一冊）、志豪（第三十七、三十九、四十冊）の三

人が順次当たっている。このうち徳福は、張徳福のことである。『戯考』第十八冊に掲載された広告記事に拠ると、張徳福は老丹桂茶園に所属していたが、上海に票房が増え、その教師として招かれることが多くなり、舞台に立たなくなったが、芝居の教授に関しては上海でも指折りであると紹介されている（第四冊に写真あり）。志強については、『戯考』第十五冊の写真から、趙志強のことだと分かるが、それ以上のことは不明。志豪は、許志豪のことであろう。彼は、名著『戯学彙考』（大東書局、1925年）の共編者であり、この他にも大東書局から『風琴胡琴京調曲譜大観』（1933年4月）や沈憬然・鄭劍西との共著『皮黄鑼鼓秘訣』（1931年6月）といった京劇の音楽関係の書物を刊行している。「正曲」にぴったりの人材であると言えよう。

#### 4-4 「校訂」

「校訂」は、燧初（第一、二、四、五、七、八、十～三十二冊、第三十九、四十冊は遂初）と振支（第六冊振支、第九冊振之）の二人である。申報館版『戯考』第一冊には、頌斌校勘と記され、中華図書館版『戯考』第一冊には、燧初と記されているから、頌斌と燧初は同一人物であろう。頌斌は『戯考』に序文も寄せていることから、王鈍根に非常に近い人物であったことが分かる。振支は、振之とも記し、『礼拝六』編集部同人の張兆琳、字振之、のことではないかと思われる<sup>22)</sup>。彼は『礼拝六』に小説も発表している。ただ、これ以上のことは、この二人についても不明である。

#### 4-5 王鈍根のネットワーク

最後に、王鈍根と呉下健児、王大錯たちの関係について。『戯考』の刊行に携わった人たちは、何らかの形で、編集者王鈍根と密接な関係を結んでいる。先述したとおり、呉下健児は、『申報』「自由談」に執筆し、王大錯や張兆琳は『礼拝六』にも小説を発表している。

また、王鈍根が編集した『礼拝六』は、当時の演劇界と多くの接点を持っていた。中華図書館から『嘯虹軒劇話』を出版した馮叔鸞は、馬二先生のペンネームで劇評小説とも呼ぶべき小説を発表している（「斬黄袍」第71期）。北京劇壇における女優の人気争奪戦を実況した小説（恨我「女伶劉喜奎之戦史」第55期）や新劇の演目名を綴り合せて一編の小説に仕立てあげたもの（那伽「可憐虫」第97期）も『礼拝六』に掲載されている。

こうした王鈍根を中心とした文人の交友圏は、『戯考』や『礼拝六』などの紙媒体を介在させながら、当時の上海の文芸雑誌の編集者、投稿者たち、演劇関係者、さらには葉九如のような出版人までその中に取り込んで広がりを見せていったようである。

更にもう一つ注意すべきは、『戯考』の作者では、王鈍根と王大錯が南社同人であったように、南社同人でありながら、なおかつ1910年代の演劇界で活躍した人物が多いことである（柳亞子、李息霜、呉梅、童愛楼、沈太侔、宋痴萍、張冥飛等）。今後こうした民国文人たちの交友を通じたネットワークの広がりを確認してゆくことが、『戯考』について考える重要な手がかりを提供してくれるように思われる。

## 5 民国初年における文化的地位

最後に、民国初年という時期において、『戯考』がどのような書物として世に問われ、また読者に

受け入れられたのかを考えてみたい。そのために、まず、『戯考』がそれまでの京劇の台本集とどのように異なっていたのかを明らかにしなければならない。

### 5-1 洋装本

第一の相違点は、その体裁である。『戯考』は、洋装本の体裁を採った最初の京劇台本集であった。それ以前に広く流通していた台本集の体裁は、多くが掌サイズの粗末な装丁の本で、芝居の四、五本を一冊（30数頁）にまとめたものである。例えば、『絵図京都三慶班京調』（全10冊、11×6.6cm）や『中華新劇京調名角脚本』（全12冊、13×8cm）などである。題簽のついた表紙をめくると芝居の一場面を描いた絵と小さな文字の台本が石印で印刷されている。文字は読みづらく、台本に関する情報もない。しかし、芝居を見慣れた者は、それほど不便を感じなかつただろうし、何より携帯に便利である。劇場での観劇用として購入されることが多かったと思われる。

一方、『戯考』は、表紙の真ん中に大きく茶色の文字で「戯考」と書かれている。その周囲を緑の葉を持つ蔓性植物が縁取り、四隅に花が数輪配されている。旧来の台本集が持つ古臭い印象を一掃する斬新なデザインである。

また、本自身も17.4×12.5cmの大きさになり、活字印刷で読みやすくなった。この本の形態的变化は、本の読まれ方の変化をもたらした。その結果刊行されたのが、ハードカバーの合訂本である。四冊を一冊に合訂したハードカバーは、そもそも携帯に向かない。むしろ書齋での読書か、書棚に並べるためのものであろう。恐らく、『戯考』の刊行が進むにつれ、『戯考』をそのように読む読者が増えたため、散逸を防ぎ、保存しやすい合訂本の需要が生まれたのだと思われる。それは、台本集の持つ文化的意味の変容であり、観劇という娯楽の質的变化と連動していただろう。

### 5-2 口絵写真

第二に、毎冊の口絵に名優の写真が5枚10頁分掲載されたことである。これも『戯考』が初めての試みであり、芝居好きの読者には、極めて魅力的に映ったと思われる。

単行本が写真を載せるのが何時頃からは分からないが、雑誌が口絵に写真を載せるのは、『中国近代期刊篇目汇録』（上海人民出版社、1983年8月）に徴する限り、1902年に始まる<sup>23)</sup>。掲載される写真は、外国や中国の政治家、有名人、各地の風景などが主である。『小説時報』第7期（1910年11月）に初めて、中国の役者の写真が載るが、それは「天津女優張金順」であり、その後も女優が多い<sup>24)</sup>。『戯考』が名優の写真を掲載するということが自体が、当時としては珍しいことであったと思われる。

先述したように、申報館が『戯考』の刊行に当たって、新聞に広告を出してまで名優の写真の収集を始めていたということは、当時は、名優の写真がそれほど出回っていなかったということであろう。そのためか、1910年代以降の文芸誌の多くは、『戯考』を真似て、口絵に名妓や役者の写真を好んで掲載するようになる。

また、文明戯の劇団である民鳴社は「正庁と包廂の全員に、役者の写真と劇本を贈呈していた」<sup>25)</sup>というから、劇場や劇団が、写真を贈呈品として配布することも早くから行われていたようである。このようにして、写真という新しい媒体に対する大衆の需要が徐々に開発されてゆくことになる。

1920年代に入ると、実事白話報社から『名伶化粧譜』（1923年2月初版）が出版され、名妓「百艷図」の刊行で有名な上海国華書局も『歌場妙影』（1923年4月）を出版する。1930年代以降になると、『坤伶百美图』（実事白話報社、1934年4月）、『現代名伶』（戯劇月刊社、1935年2月）、『名伶戲装百影第

一集』（京報出版部、1935年11月）など、挙げてゆけば切りがないほど、多くの名優写真集が刊行され、それらのいずれもがよく売れたようである。

また、1930年代から40年代にかけて、映画女優の人気の高まるとともに、そのプロマイド写真が売り出されるようになる。それに合わせて、芝居の名優のプロマイド写真も売り出されるようになったものと思われる。1941年2月24日付けの『羅賓漢』には、芝居の台本の出版で有名な好運道書局の広告が掲載されている。その広告には、名伶戯考（台本）以外に、映画俳優や芝居の名優の名前を列挙して、「明星簽名照片」や名優の「原底戯照」が一枚六分で売られている。以上のように、大衆文化の中に役者の写真が浸透してゆく契機となったのが、『戯考』の出版であったと思われる。

### 5-3 戯考

第三に、台本に「戯考」が付されたことである。これも当然『戯考』が最初である。「戯考」というのは、芝居の粗筋、聞き所、名優の演技、物語、登場人物に関する簡単な考証などからなる。『申報』「自由談」に連載された「戯考」を追ってゆくと興味深いことに気づかされる。それは、呉下健児が「戯考」の記述スタイルから、「劇話」や「劇評」というスタイルを作り出していることである。例えば、1912年6月23日、24日は、「戯考」に代わって「戯劇指南」（内容は殆ど劇話に近い）が掲載され、その後さらに「<sup>マ</sup>戯評」が書かれる。「戯考」の一部を肥大化させれば、確かに「劇話」にも「劇評」にもなることに気づく。清末民初に誕生した新しい演劇批評のスタイルが、「戯考」から生まれたと言いたいわけではない。「戯考」という記述スタイルの普及が、読者に新しい演劇の批評スタイルに親しませる素地を作ったのではないかと思うのである。

そもそも京劇の台本集を「戯考」と称すること自身に、『戯考』の立ち位置が鮮明に示されている。『戯考』「序二」（頌斌）は、「本書は諸劇二百あまりを並べ、その源流を尋ね、その事跡を考証し、かつ曲本を付す」と記す。台本集は、本来、台本が中心のはずだが、この「序文」からは、『戯考』はあくまで書名通り「戯考」部分が重要で、「曲本」（台本）は添えものだと記されている。『戯考』「序一」（鏡裏吹笙客）も、編者である王鈍根の著わした「戯考は、優れた史家の伝記の文によって世の移り変わりを写し、それらを一冊にまとめ、その文字に校訂を加えた」と記し、やはり「戯考」部分の文章と「曲文」に対する校訂を称賛している。もちろん、『戯考』は、実際にその紙面を見ればすぐにわかるように、「戯考」の方が台本の添えものであり、京劇の台本集として広く江湖に受け入れられたことに間違いはない。しかし、その書物をあえて『戯考』と称して出版したのは、台本を単なる台本として出版するのではなく、新しい文化装置として見せる意図があったからであろう。昔ながらの芝居の台本集から見れば、全くそれらしくない表紙のデザインにも、明らかにこのことが意識されていたと思われる。『戯考』が普及することにより、逆に台本のことを戯考と呼ぶのが一般的になるのである。

『戯考』の商業的成功により、その後の台本集は、多くが「戯考」を加えて出版するようになる。1920年秋月に刊行された掌サイズの石印本『戯曲図考』（上海沈鶴記書局）は、演目名の下に「考」の字をつけ、例えば「空城計考」と題して「空城計」の粗筋を記す。『戯学大観』（大成書局、1928年10月）は、演目ごとに「説明書」（粗筋）、「劇評」、「劇本」を並べ、演目によっては芝居の一場面の絵と有名な歌の一段の工尺譜も付いている。『戯学彙考』（大東書局）は、演目ごとに「角色劇中人名裝飾用具」（役柄・劇中人物名・衣装・持ち物の一覧）、「擅長名伶」（得意とする名優）、「劇情考略」が付いている。後者はやや専門的すぎるように思われるが、「戯考」の記述スタイルは、こうした所にまで

拡大していったのだと考えられよう。また、『戯学大観』は18.7×13 cm、『戯学彙考』は20×13.3 cmという大きさで、これもほぼ『戯考』（17.4×12.5 cm）に等しい。

『戯考』ではなく、『戯考新編』のスタイル（台本を載せず、戯考のみ）の方を襲った書籍も出版されている。許慕義『観劇指南』（東方書局、1914年11月）、『京劇考証百齣』（中華図書集成公司、1919年4月）、『名伶新劇考略』（立言画刊社、1939年5月）などである。

#### 5-4 王鈍根「序文」

最後に第四点として、編者による序文が巻頭に掲載され、台本集の編集意図が示されている点を取りあげたい。編者の王鈍根は、当時の文壇の中心的人物であり、その影響力は絶大であった<sup>26)</sup>。それは、彼が『申報』「自由談」、『遊戯雑誌』、『禮拜六』という、当時の文学界の三大拠点を一手に掌握していたからである。これらの誌面において彼が提唱した「遊戯文章」は、その後の文学史でしばしば批判のやり玉に挙げられてきた。

陳平原『二十世紀中国小説史（第一巻）』（北京大学出版社、1989年9月）は、民国初年の代表的作家の一人である李定夷が、袁世凱の復辟を支持する人々を論難する文章を書いたすぐあとに「戯擬怕老婆会会章」という戯文を掲載していることを指摘した上で、こうした彼の文学行為を次のように分析している。

これこそが鴛鴦蝴蝶派作家及び後期新小説家の真の姿なのである——政治面では進歩的思潮に対抗できず、場合によってはその驥尾に付そうとさえする。ただし、芸術面では、「遊戯」「消閑」に傾いている。ゆえにその全体像は、初期の新小説家とは全く異なっているのである。その反動的思想を批判しても、その「民主精神」を部分的に肯定しても、いずれもあまり要領を得ない。この時期の小説の傾向を最も良く説明するのは、「俗」の一字である。（110頁）

陳平原氏の議論は、新文学の立場から見た客観的な批評であって、鴛鴦蝴蝶派作家が当時の読者にどのように映っていたのかには言及していない。今、筆者が問題にしたいのは、陳平原氏の「俗」の一字にまとめられた結論ではなく、政治的進歩性と芸術的遊戯性とを対立させずに評価しようとするその姿勢である。このような姿勢から、鴛鴦蝴蝶派作家が当時の文化的背景においていかなる意義を持ち得たのかを考えることは、極めて重要であろう。当然、王鈍根について考える際にも、この姿勢は有効性を失っていない。

王鈍根は、『自由雑誌』の序において「自由談は、救世の文章であって、遊戯の文章ではない。その文章は遊戯であっても、その精神は救世なのだ」<sup>27)</sup>と言ひ、『遊戯雑誌』の序において「名前は遊戯ではあるが、どうして遊戯をもって見れよう。今日のいわゆる遊戯の文章が、将来人を諷める文章とならぬとも限らない」<sup>28)</sup>と言う。彼がここに示した「遊戯文学」による啓蒙の姿勢は、決して言葉の上だけのことではなかった。彼が1915年3月に『申報』「自由談」主編の職を辞したのは、日本の二十一ヶ条の要求に対する彼の憤慨が、『申報』側に容れられなかったためであった<sup>29)</sup>。彼は自らの編集する『禮拜六』に啓事を出して辞職の理由を明らかにし、さらに「国恥録」<sup>30)</sup>を連載して鬱憤を晴らしたのである。

ここで留意したいのは、王鈍根の文学態度が愛国的であるとか、「救世」と「遊戯」の間で揺れていたとか<sup>31)</sup>、或いは「遊戯」の裏には「救世」の思想があったとかいう見かけ上の「肯定的」な評

価を下すことではない。そういう評価は、陳平原氏の言う通り、王鈍根を理解する上で、あまり役に立ちそうにない。

例えば、王鈍根の記した次の二編の文章を見ていただきたい。一つは『小説叢刊』序（1914年）である<sup>32)</sup>。

作者は独り得意がり、読者はさも面白げだが、ともに小説の何たるかが分かっていないのだ。ある人の言うには、小説は単なる食後の暇つぶしにすぎず、人心を救い知識を啓蒙する大任を、小説に求めることはできないのである。ああ！もしそうであるならば、この世にどうして小説が必要だろうか。またどうして小説家を重んじる必要があるろう。

もう一編は、「礼拝六贅言」（『礼拝六』第一期、1914年6月）である。

小説を読むのであれば、銀貨一枚で珍しい小説数十編に換えることができる。疲れて書齋に戻りランプをつけて本を開く。或いは親友と論評しあい、或いは愛妻と肩を並べて読み、興が少し収まれば、あとは明日に残しておく。朝日が窓辺を照らし、花香るなか腰をおろし、小説を片手にあらゆる憂いを忘れ、一週間の疲れのあと、この一日をのんびり過ごすのは、実に素敵なことではないか。

この二編において示されている小説の効能は、一見、全く相容れないように見える。一方は小説に「人心を救い知識を啓蒙する大任」を求め、もう一方は「小説を片手にあらゆる憂いを忘れ、一週間の疲れのあと、この一日をのんびり過ごす」優れた娯楽性を求めている。

しかし、王鈍根の「遊戯文章」は、この両者を共に容れるものとして意識されていたと考えるべきだろう。それが可能だったのは、読者として想定されていたのが、エリート層ではなく、いささか文章が読める程度（粗通文字）のリテラシーを持つ、文化的・社会的地位も高くない都市の中間層に属する人々だったからではないかと思われる。都市中間層の人々にとって、王鈍根「礼拝六贅言」がかき立てるイメージは、やはり憧れの的ではなかっただろうか。友人と共に最近読んだ小説を語らったり、愛妻と読書の喜びを共有したりすることは、決して「俗」な行為ではないだろう。彼らにとって、『礼拝六』は、高級な都市文化に通じる入り口なのであった。ゆえに、そこには「人心を救い知識を啓蒙」して自己を向上させる内容も必要であり、心をなごませる娯楽性も必要なのである。「遊戯文章」が民国初年に持っていた文化的意味は、疲れを癒すための単純な娯楽でも<sup>33)</sup>、「俗」の一語でくくられる低級な文学でもなかった。

『戯考』の読者は、恐らく『遊戯雑誌』や『礼拝六』の読者とも重なっていたと思われる。『礼拝六』には、毎期のように『戯考』の広告が載り、『戯考』にも『礼拝六』の広告が載った。『戯考』第十三冊「黛玉葬花」の「戯考」部分は、梅蘭芳の演じる林黛玉の写真が『遊戯雑誌』に掲載されていることに言及している。

また、呉下健児が『戯考新編』の広告に記した「雖粗識文字者携此戯考観劇、亦無不明白之戲情」は、『戯考』の読者層をも示しているように思える。彼らには、崑曲のような高級な都市文化は消化し切れないが、京劇のような通俗的な歌詞であれば問題なく理解できた。さらにそれを通俗的なまま見せるのではなく、「戯考」という少し高級な文化的装飾を施して出版したことが、彼らの上昇志

向に合致したのであった。

さて、ここで『戯考』の序文に戻りたい。上述のような背景を踏まえて、『戯考』の序文を読めば、どのような理解が可能になるだろうか。ここでは、王鈍根の執筆に係る「序三」に絞って考察を加えたい。

彼の序文は、得意の遊戯のタッチで、次のように始まる。私はよく人に君は何故実事求是の書を作らずに『戯考』のような人を玩物喪志に導く書を作るんだと尋ねられるが、「余性根極頑鈍，不能辨実事与戯劇之別」ととぼけてみせ、あれこれ議論した末、最後に次のように記す。

私は今の人がこの戯考を結局は戯考として見るのではなく、実事求是の書として見てほしいと思う。恐らく、実事と芝居とは、特にはっきりとした区別はないからである。未来について言えば、私が一事を行いたいと思うのと一幕演じたいと思うのとは区別がない。現在について言えば、私がちょうど一事を行いたいと思うのとちょうど一幕演じたいと思うのとは区別がない。過去について言えば、私がかつて悲歡離合の経験をしたということと私がかつて悲歡離合の芝居を演じたということとは区別がない。実事と芝居は区別がないのである。ゆえに私たちは今日実事の場にいるのか、それとも芝居の場にいるのか知ることができない。しかし、今多くの人がこの戯考を喜んで見るところから検証すれば、私たちが今いるのは、実は芝居の場であること疑いないのである。

こうした遊戯文章の背景に、民国以来の度重なる政変が芝居さながらに繰り広げられてきたことに対する諷諭があることは間違いない。しかし、それだけでは王鈍根らしいとは言えないだろう。彼のこの人生と芝居を意図的に混同する生活態度は、生活自身の戯劇化、生活自身の芸術化を意味しているように思われる。それは、民国の新しい文明的生活の創造に参画し、それを享受するよう読者に求めているとも言えよう。王鈍根は、旧来の芝居という娯楽を『戯考』によって新しい文明的な娯楽に生まれ変わらせ、健全な娯楽によって彩られた文化的な生活を読者に提供しようと考えたわけである。

『戯考』が伝統演目だけではなく、少数ながら新編劇を取めたのも、京劇の持つ新しい価値創造力を認めたからであろう。『戯考』に収められた新編劇には、上海で流行していた連台本戯もあったが、北京で梅蘭芳たちが創始した古装戯（「黛玉葬花」、「嫦娥奔月」、「天女散花」）も含まれていた。それら新編劇の台本の中には、場割りが記され、伝統演目との違いが明示されているものもある（連台本戯の「狸猫換太子」、古装戯の「嫦娥奔月」、「天女散花」など）。伝統的な美意識を現代的な視点から再構成する新編劇の方向性は、民国初年の、なお伝統的な生活様式が色濃く残る社会環境の中で、文明的な生活を創造する参照枠ともなったであろう。『戯考』が民国初年の読者に受け止められたであろう文化的意味は、単なる芝居の台本集という一事によっては覆い尽くせない、多様な文化的意味を備えていたように思うのである。

## 注

- 1) 朱聯保編撰・曹予庭校訂『近現代上海出版業印象記』学林出版社、1993年2月、94頁。
- 2) 以下の葉九如の記述は、原放「記上海市書業公会」、「上海書業公所職員名單」（『出版史料』1987年第4期）、潘之君「民国上海書業“正心团”与色情小説之查禁」（『百年書業』上海書店出版社、2008年5月）、陳乃乾「上海書業公会史」（上海『大晚報』1946年5月）に拠る。

- 3) 李健青(李定夷)「民初上海文壇」(『上海地方史資料(四)』上海社會科學院出版社、1986年12月、215頁)。
- 4) 朱聯保編撰・曹予庭校訂『近現代上海出版業印象記』(前出)、298、378頁。
- 5) 朱聯保編撰・曹予庭校訂『近現代上海出版業印象記』(前出)、378頁。
- 6) 「上海市書業同業公會文獻檔案八件」(『出版史料』1987年第4期)の一。
- 7) 「上海市書業同業公會文獻檔案八件」(『出版史料』1987年第4期)の一。
- 8) 朱聯保編撰・曹予庭校訂『近現代上海出版業印象記』(前出)、378頁。
- 9) 『中國近現代通俗文學史(下卷)』(江蘇教育出版社、2000年4月)「第七編通俗期刊編」所載の「表2-1 1909-1921年中國文學期刊雜誌表」に若干の修訂を加えた。朱聯保『近現代上海出版業印象記』(前出)の「中華図書館」の項も参照。朱聯保は、『自由雜誌』が中華図書館の出版物だとしているが、『申報』の広告に拠れば、申報館が総發行所であり、中華図書館はその販売所に過ぎないため、一覽からは外した。尚、『禮拜六』と『女子世界』の二誌は、『中國近代期刊篇目彙録(5)』第三卷(上册)(上海人民出版社、1983年8月)によってその総目録を見ることができる(『禮拜六』は第1-100期のみ)。
- 10) 「表2-1 1909-1921年中國文學期刊雜誌表」(『中國近現代通俗文學史(下卷)』江蘇教育出版社、2000年4月、552-555頁)の記載内容に拠る。
- 11) 『禮拜六』の販売部数に関する関係者以外の証言としては、張静廬『在出版界二十年』(上海雜誌公司、1938年、上海書店、1984年影印)に「禮拜六真是再紅也没有的刊物,在六十期以前(中略),確有幾期銷過一二万本以上的。」(36頁)とある。
- 12) 周瘦鵑「閑話《禮拜六》」(『拈花集』上海文芸出版社、1983年6月、94頁)。
- 13) 『中國近現代通俗文學史(下卷)』(江蘇教育出版社、2000年4月)の第四篇第三章、第四章、第七章の章題に拠る。
- 14) 『禮拜六』第五期所載の広告「編輯新戲考露布」(「新戲考」は「新劇考」の誤)。
- 15) 藤野真子「1910年代上海における伝統劇評の視点と表現」(関西学院大学言語教育研究センター『言語と文化』第7号、2004年3月)には、呉下健児と玄郎が同一人物であることが指摘されている。
- 16) 『禮拜六』第38期(1915年2月)の口絵「本社編輯部同人合影」に「王鼎(大錯)」の名が見える。徐斯年「禮拜六」(『辛亥革命時期期刊介紹(第五集)』人民出版社、1987年11月)にも同様の指摘がある。ただし、陳玉堂編著『中國近現代人物名号大辭典(全編増訂本)』(浙江古籍出版社、2005年1月)に記された王鼎の筆名に「大錯」は挙がっていない。
- 17) 張静廬『在出版界二十年』は、『自由雜誌』は中華図書館が印刷發行していたと記す(35頁)。
- 18) 里仁書局、民国69年6-7月。上海書店、1990年。陸大偉氏の論文に拠れば、上海書店影印本は、中華図書館版を影印したと称しているが、実際には大東版であるという。
- 19) 「上海市書業同業公會文獻檔案八件」(『出版史料』1987年第4期)の一。
- 20) 孔繁「大東書局概況」(『出版史料』1990年第4期)。
- 21) 藤野真子「1910年代上海における伝統劇評の視点と表現」(前出)注38には、『自由雜誌』第1期(1913年9月)を引用して、呉下健児の本名と出身地が「顧乾元・江蘇省崑山出身」であることが紹介されている。
- 22) 『禮拜六』第38期(1915年2月)の口絵「本社編輯部同人合影」に「張兆琳(振之)」の名がある。「振支」と「振之」は同一人物で、張兆琳であると思われる。
- 23) 方漢奇「我国早期報刊上的新聞照片」(『報史与報人』新華出版社、1991年12月)は、最も早く写真(原文:新聞照片)を掲載した中国刊行物は、日本で創刊された『新民叢報』であり、国内で刊行されたものでは『日俄戦記』(商務印書館、1904年)であるという。
- 24) 『小説時報』では、写真を集めるのが困難なため、出版元の狄楚青が、自ら写真館(民影照相館)を立ち上げ、妓女たちを呼んで写真を撮ったという(包天笑『鈞影樓回憶録』中国大百科全書出版社、2009年1月、358、359頁)。
- 25) 慧劍投稿「劇談」(『申報』民国2年12月3日)。
- 26) 張静廬『在出版界二十年』(上海雜誌公司、1938年、上海書店、1984年影印)は「那時候文壇的領袖者有二個巨頭,一位是青浦王鈍根先生,一位是吳門包天笑(朗孫)先生,而包先生的勢力似乎不及王先生」



(34頁)という。王鈍根の専論は数少ないが、『中国近現代通俗文学史(下巻)』の当該箇所(第七編通俗期刊編、第三節 569-576頁)の外に、王樊逸「在“救世”与“遊戯”之間——王鈍根編輯思想芻議」(『蘇州科技学院学報(社会科学版)』第24卷第2期、2007年5月)、虎闌「“文化社会之花”王鈍根」(『図書館雑誌』2008年第5期)などがある。

27) 原文未見。注(26)に示した王樊逸論文所引に拠る。

28) 原文未見。注(26)に示した王樊逸論文所引に拠る。

29) 「鈍根啓事」(『礼拜六』第44期、1915年4月)。

30) 『礼拜六』第51期(1915年5月22日)～第58期(1915年7月10日)まで連載された。

31) 王樊逸「在“救世”与“遊戯”之間——王鈍根編輯思想芻議」(『蘇州科技学院学報(社会科学版)』第24卷第2期、2007年5月)。

32) 陳平原、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料・第一卷(1897-1916)』北京大学出版社、1989年3月、473頁。

33) 李長莉『中国人的生活方式: 從伝統至近代』(四川人民出版社、2008年4月)の『申報』「自由談」に対する評価は、「可以在茶余飯後、灯下睡前轻松地閱讀一下副刊、以為調節和消遣」(623頁)である。

\* 本稿は、2009年5月16日・17日に、中国戯曲学院の主催で北京において開催された「京劇与現代中国社会——第三届京劇学国際學術研討会」での報告内容をもとに、その後の知見を踏まえ、修正を加えたものである。

(大阪市立大学大学院文学研究科教授)